

渥美郡三町の時代



郷土史編さん室 ☎36局6503

昭和の合併当時、田原町の工業は

昭和30年代後半の池田内閣以降、わが国は高度経済成長期と呼ばれる時代を迎え、全国的に工業が発展しました。

しかし、当時の田原町は、従来の地場産業として、石灰およびセメント製造以外には、味噌・たまりなどの醸造や製飴、漬物などの食品加工業が主な産業でした。企業規模は中々小さく、郡内三町の製造品出荷額割合（昭和32年）を見ると、8割近くを田原町が占めて

いて、最も工業が盛んであった様子うかがえます。昭和35年、田原町にはおよそ100の事業所がありました。一例として、郡内で盛んであったノリ製造にかかわりが深く、全国に展開した企業をご紹介します。

◆渡邊機開工業株式会社

渡邊機開工業は、昭和16年に農機具（渡邊式カルチベーター）が農林省推奨品として官報に掲載されるなどし、出荷額を伸ばしました。しかし、昭和30年代になると、耕耘機こうりんきが出回り始め、カルチベーターの受注も減少していききました。

そのころ、二代目社長渡邊長吉氏が海苔脱水機を開発しました。

当時、渥美半島のノリ



●ノリ海苔脱水機 渡邊機開工業提供



●カルチベーター 渡邊機開工業提供

りは、牟呂を中

心に6000軒を上回る漁民が生産していました。冬の寒い時に自然乾燥させていたため、下の方が乾かず、乾燥に2日もかけていた時代です。そのため、ノリ自体の等級も落ちてしまい、漁民の大きな悩みでもありました。

そこで、ノリを型にはめ遠心力で一気に脱水する機械を開発したのです。「カルチベーターから海苔脱水機にかわつてから経営が安定してきた。海苔は全国に平均して作られており機械もある程度量産ができる」（田原青年会議所広報誌昭和56年）「ノリの業界は小さいため、大手が参入できない」（現社長・渡邊佳成氏談）

しかし、昭和40年代になると、ノリ

の養殖が衰退してきました。別の製品を作ろうともしましたが、「少ないノリ屋が欲しがらるもの、付加価値のあるものを作ろう」と考え、海苔脱水機だけではなく、異物除去機の開発にも成功しました。このような経緯から、渡邊機開工業の海苔機械は全国の漁場へ販路を拡大していったのです。

昭和中期以降、時代の流れで業種変更をした企業や廃業してしまった企業もあります。渡邊機開工業に限りませんが、昭和の合併のころも現在同様、多くの企業が生き残りをかけ、新商品の開発などの企業努力をした時代なのです。

（執筆委員・藤井啓貴）

今月の「表紙」

夏の日差しが照りつける真夏の昼下がりが、立っているだけで暑さにくらくらする大人に対し、階段の先に何があるのか知りたくて駆け出す子どもたち。夏休みも終盤にさしかかりましたが、まだまだ夏本番。夏ならではの楽しみを見つけに行きましよう。(O)

【表紙の写真】階段を駆け登る子どもと登山（浦町）